

# 奈良教育大学附属学校園の園児・保護者・生徒の協同によるESD活動の実践(2年次)

鎌田大雅  
(奈良教育大学附属幼稚園)  
長友紀子  
(奈良教育大学附属中学校)  
長谷川かおり・丸尾晶子・河合理沙  
(奈良教育大学附属幼稚園)  
成田奈津美・挽地夕姫・若森達哉・山本浩大  
(奈良教育大学附属中学校)  
中澤静男  
(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)  
苗代昇妥  
(奈良教育大学 英語教育専修)

ESD Activities in Collaboration with children, protector of the Affiliated Kindergarten and student of the Affiliated Junior High School II

Taiga KAMADA  
(Kindergarten attached to Nara University of Education)  
Noriko NAGATOMO  
(Junior High School attached to Nara University of Education)  
Kaori HASEGAWA, Akiko MARUO, Risa KAWAI  
(Kindergarten attached to Nara University of Education)  
Natsumi NARITA, Yuuki HIKICHI, Tatsuya WAKAMORI, Kohdai YAMAMOTO  
(Junior High School attached to Nara University of Education)  
Shizuo NAKAZAWA  
(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)  
Shota NAWASHIRO  
(English Education Specialization, Nara University of Education)

**要旨：**本実践は、奈良教育大学附属幼稚園と奈良教育大学附属中学校が協同的な ESD の活動をデザインすることを通して、幼稚園と中学校における新たな実践の提案を目的とするものである。今回の研究報告において、実践の報告をすることが叶わなかったが、昨年度から両校園で行なっているコキアの栽培を通して、単発的な交流ではなく、共通の経験をした園児とその保護者、生徒が集まり交流することの意義や可能性について明らかにしたいと考えている。

**キーワード：**持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development  
接続教育 connection between school stages  
幼児教育 preschool education

## 1. はじめに

奈良教育大学附属学校園は、幼小中全ての学校園がユネスコスクールに加盟しており、ESD を意識した学習活動、保育実践を行っている。奈良教育大学附属幼稚園(以下、附属幼稚園と記載)では、現在、ESD の価値観を取り入れた新たな教育課程の開発を行っており、教育目標の見直しや幼児期において発揮される資質能力の検討を行っている。また奈良教育大学附属中学校(以下、附属中学校と記載)においても、総合的な学習の時間で

は「1・2年生合同奈良めぐり」協同学習を実施するなど、総合的な学習の時間、教科学習、特別活動を通して、教育課程を ESD の価値観を軸に編成している。

昨年度から両校園にて、コキアの栽培を通じた ESD 活動の実践を行っている。今年度も昨年度の成果と課題を受け、コキアの栽培を通じた ESD 活動を新たに創り出し、実践することとした。

本論の執筆は 2.3 附属中学校の実践の部分で長友が担当し、その他を鎌田が担当した。

### 1.1. 問題意識

昨年度の実践により、園児にとってコミュニケーションの力や何かを主体的にやりたいと思う気持ちが育ったことが示唆された。生徒にとっては、これまでの総合学習や教科で行ってきたものとは違ったアプローチでESDについて考えることができた。さらに、附属中学校の特別活動の中にESDに関する学びの場を創生した意義が見出せた。

ただ、教員同士の交流の機会はこれまで以上に増えたが、園児と生徒が直接関わる機会をつくることはできなかった。コロナ禍が明けた今だからこそ、校種間を超えた園児と生徒の直接的な交流が必要ではないかと考えた。また、ESDの活動の実践において、特に幼児期は保護者のかかわりが大きく影響を与えるため、保護者を巻き込んだ活動の創生が必要であると考えた。

## 1. 2. 先行研究

天野(2014)・藤原ら(2002)・学習指導要領解説(2017)によると、園児と中学校の生徒が交流をする機会は職場体験や家庭科の中での“ふれ合い体験活動”がほとんどである。その場限りの単発的な交流として、幼稚園にきて、園児の生活に中学生が入り込む関わりとなっており、園児と生徒が共同して活動に取り組んだり、同じ経験を元に交流したりする活動はまだ多くはないことが考えられる。

また、中堀ら(2016)によると、家庭環境や保護者の考え方は園児に直接影響を及ぼすことが多いことが示されている。このことから、幼児期のESDの活動において、園児のみならず、その保護者に向けた、何らかの働きかけが必要となり、そのことで園児に大きな影響を及ぼすことが考えられる。

さらに幼児期においては直接体験が重視されている(幼稚園教育要領(2018))。木田ら(2012)によると、直接的な栽培活動が幼児の意識を変える可能性が示されており、本実践におけるコキアの栽培・ほうきづくりにおいて、園児の身近なものについて考える機会となり得ることが予想される。

以上のことから、保護者を巻き込んだ、直接的な栽培活動を通して、園児と生徒が共通で経験したことをもとに、共同作業を行い、交流できる活動について考え、実践していきたいと考える。

## 2. 実践の概要

### 2. 1. 実践全体の流れ

本実践は、附属幼稚園と附属中学校がそれぞれに行った活動と、12月に予定している合同の活動で構成される。まずは全体の流れを示し、附属幼稚園の活動、附属中学校の活動、最後に合同で行う活動の予定をそれぞれ報告する。  
全体計画

実施時期	2023年6月～12月
活動場所	附属幼稚園・附属中学校
参加者	附属幼稚園(たいようぐみ園児・保護者) 附属中学校(ユネスコクラブ・環境整美部・美術部・裏山クラブ) 奈良教育大学ユネスコクラブ
活動内容	6月～11月 コキアの栽培 6月 コキアの苗を希望する家庭に配布 11月 コキアの収穫、ほうき製作 12月 附属中学校にて、園児、保護者、生徒、学生が参加してのワークショップの開催

### 2. 2. 附属幼稚園の実践

附属幼稚園では、コキア栽培を通じたESD活動の実践を表1のように計画し、実施した。活動の概要について述べる。

表1

時期	活動名	内容
6月	コキアの種植え	コキアの種をポットに植える。
6月	コキアの世話	毎日、水やりをして、様子を見る。
6月下旬	コキアの苗を配布	苗の配布を希望した家庭に1つ苗を持ち帰って育ててもらう。
8月	コキアの苗の植え替え	夏休み中にコキアの苗をクラスの目の前にある広い畑に植え替える。
11月	コキアの収穫	コキアの収穫を行い、種取りをする。
11月	コキアのほうき作り	生活グループ(1グループ5人)で一つのほうきを作る。
11月	保護者へのアンケート	コキアの苗を持ち帰った家庭に対してアンケートを実施する。

活動を通じた園児の様子

#### 【コキアの種植え・コキアの世話】

コキアの種を初めて見た子どもたちは「うわあ、すごい小さいね」「こんな小さいのでコキアになるの?」と、小さな種を見て、思ったことを口々に話した。小さな種を大事そうにもち、土を入れたポットに丁寧に撒き、ジョウを使って水をたっぷりあげる。

翌日から、登園してくると「コキアちゃんの芽は出るかな」「しっかり水あげないと」と、友達や先生と一緒に話をしながら世話をする子どもが多かった。

#### 【コキアの収穫・コキアのほうき作り】

11月に入り赤かったコキアが一気に枯れて茶色くなった。保育室で使っていたコキアのほうき(保育者が家庭で作って持ってきたもの)を見ながら「ほうきみたいに茶色くなってるな」と、様子を見ている子どもたち

から声があがった。育てたコキアを使ってほうきを作ることを子どもたちに提案し、生活グループで一株ずつコキアを収穫して作ることにした。

収穫したコキアから種を取る際、家庭にコキアを持ち帰っていない子どもたちだけのグループでは、慎重に、恐る恐る指先だけを使って種取りをしていた。コキアを持ち帰り栽培していた子どもがいるグループでは、躊躇せず、大胆に手のひらを使ってどんどん取り進めていた。「いっぱいやね、これ全部種ってすごいな」「まだここにもついているよ」と、収穫したコキアを目の前にして、一人一人がじっくりと見ながら種取りを楽しんだ。また、種を入れるケースの外に落ちた種も、コキアをほうきのようにしながら集めて、こぼれ落ちたものも全て子どもたちの手によって集めることができた。

種取りの翌日にほうき作りを行った。生活グループの中で 1 人、ノコギリを使って根本を切り落とす人を決め、順番に切っていく。切ったグループから麻紐を受け取り、自分たちでコキアの根本から麻紐を巻き上げていく。麻紐を巻いてほうきが出来上がると、「順番に使ってみようよ」「ノコギリで切った後のゴミ集めるよ」と、早速、出来上がったほうきを嬉しそうに使い自分たちで掃除を始めた。

その翌日から、遊んだ後の部屋の片付けの際に、積極的にコキアのほうきを使って掃除する姿が増えた。

【保護者へのアンケート】

コキアを持ち帰った保護者に対してアンケートを実施した。表 2 はアンケートの結果である。

表 2

質問内容	よくかかわっていた	少しかかわっていた	あまりなかった	まったくなかった
お子さんはコキアにどの程度関わっていましたか	22.2%	77.8%	0%	0%
	とてもそう思う	そう思う	特に変わらない	わからない
コキアにかかわったことでお子さんの植物への関心は高まったと思いますか。	44.4%	44.4%	11.1%	0%
	よくかかわっていた	少しかかわっていた	あまりなかった	まったくなかった
保護者の方はコキアにどの程度かかわっていましたか	66.6%	22.2%	11.1%	0%
	とてもそう思う	そう思う	特に変わらない	わからない
コキアにかかわったことで保護者の方の植物への関心は高まったと思いますか。	44.4%	33.3%	22.2%	0%

今回のアンケートの結果から、家庭で子どもが保護者と一緒にコキアに関わることで、ほとんどの子どもが植物への関心を高めたことがわかる。さらに、コキアへの

関わりは子どもに比べて明らかに、保護者が多くかかわっていたことがわかる。

子どもの変化と育ち・保護者の変化

コキアを種から育てたことで、小さな変化に気づいたり、成長をじっくり見守り、楽しみに待つ姿が見られた。成長したことを喜んだり、どのように変化していくのかに期待を寄せながら対象に関わっていた。収穫からほうき作りの工程を全て自分たちで行ったことで、出来上がったほうきに愛着が湧き、自分たちの生活に積極的に取り入れる姿に繋がった。今年度は家庭に持ち帰ったことで、保護者のコキアへの関心が高まった。また、家庭に持ち帰った子どもがよりコキアに対して積極的に関わっていた。

幼稚園において家庭を巻き込んだ活動を計画し、実践することで、子どもや保護者の価値観や関心を変化させるきっかけになることが示唆された。

2.3. 附属中学校の実践

附属中学校では、コキア栽培を通じた ESD 活動の実践を表 3 のように計画した。第 1 期は令和 5 年 4 月～9 月、第 2 期は同年 9 月～12 月の活動とし、現在は、第 2 期を実施している最中である。第 1 期、第 2 期それぞれの活動の概要について述べる。

表 3

実施時期	内容
第 1 期 (4 月～10 月)	4 月 ・生徒にコキアの栽培を呼びかける ・希望生徒にコキアの株を配布し、家庭で栽培を開始する ・附属中学校内でコキアの栽培開始する 5 月～9 月 ・googleclassroom で、コキアの成長の様子を共有する。 10 月 ・コキアの株が枯れるのを待ち、収穫する
第 2 期 (10 月～12 月)	10 月 ・コキアを使った道具作りワークショップの実行委員を募る ・実行委員とともに、道具作りワークショップの計画を練る 11 月 ・奈良教育大学ユネスコクラブとオンラインミーティングを実施し、道具作りワークショップの詳細を決定する 12 月 16 日（土） ・附属幼稚園、附属中学校、大学ユネスコクラブで道具作りワークショップを実施する 12 月 ・成果を google classroom で共有する

第 1 期は、令和 5 年 4 月から開始した。附属中学校では、生徒会活動の中心となる中央委員会の任期を 10 月から 9 月の 1 年間として活動し、その中で生徒会専門部と呼ばれる委員が半年ごとに入れ替わる制度になっている。したがって、4 月から 9 月は、生徒会活動が実質的

に後半に入る時期となる。そのため、令和4年度の実践でコキア栽培の中心として活動した2年生が新3年生として活動の中心となりながらも、次世代の2年生へ活動の内容を引き継ぐことができるように活動を開始した。

活動の中心となったのは、令和4年度の実践に引き続き、環境整美部と呼ばれる専門部のメンバーである。令和4年度の実践の課題として、活動が専門部以外の生徒に広がらなかったことがあげられたため、今年度は、環境整美部が中心になって全校生徒にコキアの栽培を呼びかけることになった。

呼びかけに当たって、活動を共有できるように、「コキアプロジェクト」のgoogle classroomを立ち上げ、全校生徒に共有した。コキアの栽培を希望した生徒に株を配布し、各家庭での栽培を開始してもらうと同時に、コキアの成長の様子をclassroomに写真等で投稿してもらうように依頼した。コキアの栽培を行ったのは、1年生3名、2年生1名、3年生1名の計5名である。また、附属中学校教員からも希望者3名、大学教員1名が栽培を行った。

附属中学校では、プランターにコキアを植え、校門を入れてすぐのロータリーに設置した(図1)。生徒が登下校する際に自然に目に入るようにして、日常の中でコキアを見たり意識したりすることができるように配慮した。



図1

コキアの栽培が始まって、9月まではそれぞれの家庭や学校でコキアの様子を観察することが活動の中心となった。各家庭のコキアは順調に成長し、様子をclassroomで共有することができた。9月に入るとコキアは赤く色づき始め、10月には紅葉が最盛期に入り、その後枯れて収穫ができる状態になった。

次に、第2期の活動の概要である。第2期は、10月から開始した。生徒会活動の中心が3年生から2年生へ移り、生徒会専門部のメンバーも入れ替わり、新しい2年生を中心としたメンバーで活動を開始した。第2期は、栽培したコキアを使って道具作りのワークショップを行うことを活動の中心として計画した。

道具作りは、令和4年の実践でも環境整美部を中心として行ったが、その時はコキアの数が少なく、コキアのほうき以外に藁を材料にして藁ほうきを作った。今年度

は、前年度よりもコキアの数が増えたものの、活動するメンバーも増えたため、コキアの数が十分とはいえず、道具作りワークショップをどのような内容にするかについて検討が必要であった。

道具作りのワークショップを計画するに当たって、環境整美部を中心に附属中学校ユネスコクラブ、美術部のメンバーが参加することになった。ユネスコクラブは大学のユネスコクラブとも継続して活動を行っており、美術部は道具のデザインやものづくりに興味のある生徒がいたため、参加を呼びかけた。その結果、中心となるメンバーは環境整美部2名、ユネスコクラブ2名、美術部2名の6名となり、この6名の生徒(実行委員と称する)を中心に話し合いを行うこととした。

まず、実行委員で、道具作りワークショップの内容について検討する話し合いを行った。話し合いの要件は、①どんな道具を作るか、②幼稚園の園児とどうやって交流するかの、大きく2点が中心となった。まず、①の要件については、コキアの数で十分でないことを踏まえ、昨年と同様藁を材料にした活動が提案された。実行委員のうち、環境整美部の生徒は前年度の活動に参加しており、藁ほうきを制作した経験があったため、藁ほうきを作成する案が出たが、②の要件を同時に考えていくうちに、幼稚園の園児と一緒にできる活動に話し合いの中心が移り、結果、藁ふでを作って中学生と園児と一緒に絵を描く活動をするという案が採用されることになった。

実行委員での話し合いは2回行われ、①についてはコキアほうきと藁ふで制作、どんぐり工作を行い、②については大学ユネスコクラブメンバーと相談をしながら、さらに詳細を決定していくことになった。

大学ユネスコクラブのメンバーとのオンラインミーティングは、11月に3回実施した。

大学ユネスコクラブからは、延べ3名の学生が参加し、実行委員との話し合いを重ねた。話し合いの中で、②の幼稚園との交流については、大学ユネスコクラブの学生と、附属中学校生徒、附属幼稚園園児がそれぞれ入ったグループを作り、中学生が園児に教えながら、必要に応じて大学生がサポートする形を取ること、ワークショップの最後に活動の感想や気づきを共有する時間を作ることなどが決定された。

第2期は、現在12月16日(土)の道具作りワークショップに向けて準備を行っている最中で、当日は、実行委員以外に、希望する附属中学校生徒が参加する予定ある。本論では、道具作りワークショップの実践そのものについて報告することはできないが、実施後は中学生、園児、大学生、保護者から本実践を通しての意見を収集し、成果と課題を抽出・検討して今後の実践への示唆とする予定である。

## 2.4. 園児と生徒の交流の内容

附属幼稚園と附属中学校、それぞれで取り組んできた

ことをもとに、園児とその保護者と生徒、大学生を含めたワークショップの開催を計画している。

#### 活動計画

- 実施時期 2023 年 12 月 16 日土曜日  
 活動場所 奈良教育大学附属中学校  
 参加者 附属幼稚園 (たいようぐみ園児・保護者)  
 附属中学校 (ユネスコクラブ・環境整美部・美術部・裏山クラブ)  
 奈良教育大学ユネスコクラブ
- 活動内容 ①コキアを育てた時に気づいたことや感想などの交流  
 ②コキアほうき作り・わらほうき作り  
 ③わら筆づくり・どんぐり工作  
 ④活動の振り返り

活動の概要は以上の通りである。生徒たちが自主的に考えた内容をもとに構成を考え、コキアだけでなく、身近な自然物を用いて普段使っているものや楽しめるものを作ることができることを、このワークショップを通して楽しみながら感じてもらうことを目的として実施する。また、園児と生徒との直接的な交流の場ができるようにして、意見や感想の交流にとどまらず、協力して作業を行うことができるようにする。

### 3. 成果と課題

#### 3.1. 成果と課題

本実践において、両附属校園において活動に関わる人が大きく広がったことが成果として挙げられる。特に、附属幼稚園においては、幼児期において重要である園児の保護者にも実際にコキアに関わってもらえる機会を提供できたことは、園児にとっても影響が大きかったことが考えられる。また、附属中学校においても、委員会活動にとどまらず、部活動にも活動の輪が広がり、附属幼稚園と同様に家庭にも広がりを見せた。さらに、コキアのプランターの位置を全校生徒が見える場所に置いたり、Googleclassroom を活用したりして、コキアの活動がより多くの生徒に知れ渡ることになったことが考えられる。

そして、今年度は、園児とその保護者、そして生徒、さらには大学生が参加して、互いに交流ができる場を創

り出すことができた。活動の内容等は現在、計画段階ではあるが、園児と生徒の新しい形での交流の機会となるよう検討を重ね実施したい。

課題は、附属幼稚園において、家庭でのコキアの栽培と園でのコキアの栽培に関連した交流が持てなかったことが挙げられる。持ち帰っている家庭と、日々の様子の交流をどのように行うかによって、家庭と園の結びつきが強くなり、保護者の意識をより変える結果につながるのではないかと考えられる。

#### 3.2. 今後の展望

まずは 12 月に行うワークショップに向けて、教員同士の打ち合わせに加えて、生徒たちの意見も取り入れながら内容の検討を行いたい。その上で、ワークショップ当日は、コキアの栽培という共通の経験をした園児と生徒がどのようなかわりをするのかを丁寧に読み取り、実践を通しての意見を収集し、今後、継続して実践を行なっていくことを考えていきたい。

#### 参考文献

- 天野美和子 (2014), 「幼稚園・保育園における幼児と中学生との“ふれ合い体験活動”を通しての幼児側の経験」, 日本家庭科教育学会誌 57(3), pp.196 ~ 207
- 木田春代, 武田文, 荒川義人, 大久保岩男 (2012), 「幼稚園における野菜栽培活動の状況とその食育効果 - 北海道某市での調査 -」, 天使大学 紀要 Vol.13 No.2
- 中堀伸枝, 関根道和, 山田正明, 立瀬剛志 (2016), 「子供の食行動・生活習慣・健康と家庭環境との関連: 文部科学省スーパー食育スクール事業の結果から」, 第 63 巻, 日本公衛誌, 第 4 号
- 藤原由美子, 猪野郁子 (2002), 「中学生の幼児ふれ合い体験学習に関する研究」, 島根大学教育学部紀要 (教育科学) 第 36 巻, pp.27 ~ 35
- 文部科学省 (2017), 「【技術・家庭編】 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説」,  
[https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018\\_009.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2019/03/18/1387018_009.pdf)

